

流暢な習慣

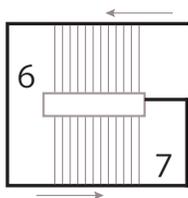
たとえば、ギリシア神話でイカロスは、蠟で固めた鳥の羽根によって自由な飛行能力を得たが、太陽に近づきすぎたため蠟が溶けて墮落死した。人類の過信と傲慢さの教訓である。きっとイカロスの羽根は、よほど身体に馴染んでいた。そのとき、次第に不安や臆病さは取り除かれ、彼の飛行は流暢になるのだ。

さて、我々人類はだいたいの習慣に対して無自覚である。とは言え、あらゆる習慣は社会と強くあるいは弱く結びつき、その関係性の中で行われる。他者や社会の様子を窺いながら、あるいは反映しながら、もしくは教育付けられながら習慣を身につける。はたして、私たちの習慣は如何にして社会を形作っていくのか、そして社会は如何にして我々に習慣を埋め込むのか。

「免疫をつけるために赤ちゃんの頃に動物園に連れて行く」、「空き缶は洗ってリサイクルの日に捨てる」。私たちはここ大阪に横たわる習慣を集めた。たとえばこのようなアンケートの回答は、私たちの制作の動機となった。私たちは、こうして集めたメディウムやコンテキストの断片からなる彫刻を作る。流暢さへの阻害によって「流暢な習慣」はあるほつれや違和感を生み出す。それは本来的な臆病さをふと思い返す引き金になる。

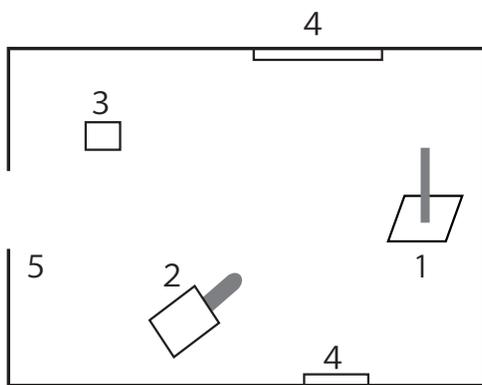
湯川洋康・中安恵一

1 私たちが制作過程で一貫して行っている、物質の拾遺とそれを通じた社会への介入。祈願の物質、偶然の物質、そして、習慣の物質として集めたオリーブの枯れ木、鳥の羽根、アルミニウム片。ここでは、私たちの拾遺の現場である。



2 アルミ缶のモザイク画。アルミ缶は、釜ヶ崎地区の人たちに仕事として集めてもらった。美術絵画の市場相場はアルミ缶リサイクルのそれとは比べものにならないほど揺れ動く。ここで集められたアルミニウムは複数の市場を往き来する。いつもはリサイクル市場の相場に従順な彼らが、それに終符を打ったとも言える。

3 イメージの断片化が想像力による虚像を作る。アルミニウムの断片もまたそうである。私たちは、意識化しづらい習慣を扱うための手法として、このような彫刻的阻害を試みる。



4 鳥の羽根・アルミ缶 1,000 個購入の領収書・募金箱の羽根のデザインには、彫刻的阻害によってモザイクがかけられている。

7 この羽根は自然色か、それとも人工着色か。

6 展示室内とは違い、ここの枯れ木には無菌化した鳥の羽根が葉のように色とりどりに茂っている。

5 enoco に赤い羽根の募金箱を設置した。この赤い羽根は交換されず残ったものである。監視員の衣服に付いたその赤い羽根は、無言で社会的な主張をしている。その反対には羽根で作ったアクセサリーが対称的に並ぶ。個人の感情・気分・そしてファッションの主張。羽根は、付与された象徴性 / 装飾性のグラデーションと、人工着色の混じった色彩の不気味さによって異彩を放つ。

I リサイクル

いまやりサイクルや分別は、日本ではすっかり定着した。定着とは社会習慣化である。社会習慣化した習慣は、自然と「よき行い」とそうでない行いを区別する。社会習慣はモラルを作り出す。このとき社会習慣の是非が問われることはもはや無く、社会習慣におけるモラルばかりに目が向く。裏返せば、リサイクルや分別を「正しく」するだけで廃棄行為が正当であるという感覚を我々に持たせてくれる。

そしてもう一つ、社会習慣化は相場を生み出す。人々の行動が習慣化し、だんだんと流暢になれば、人や物の流れはシステムティックになり、金銭のやりとりは相場として適当なところに落ち着く。相場を作る社会習慣と、それに左右される物質やその価値評価について。私たちがリサイクルに目を向けた動機はここにあった。

綺麗なアルミ缶は、確立されたりサイクルの過程では意外にも集まらない。リサイクルされるアルミ缶は通常潰して集めるためである。

私たちは、釜ヶ崎地区の人たちへ「綺麗な」アルミ缶集めの仕事を依頼した。通常のアルミ缶集めと異なるこの仕事には、そのアプノーマルさゆえに新たに相場を決める必要があることを私たちは知った。何度か交渉を行った結果、その特殊なアルミ缶集めの相場は定まっていた。やはり相場は、習慣の強弱と関係している。

空き缶の意匠は、社会に溶け込みきっている。私たちがあまりにも馴染みきった意匠である。

私たちは、集まった空き缶を商品パッケージ化されたアルミニウム片として捉え、用いる。そして、そのイメージを部分的に切断して美的なるものへの還元を試みる。善的なるもの、美的なるもの。現代の消費社会は、それぞれの違和感を教えてくれる。

II 噂と迷信

幼少の頃、町中や自然にいる鳥や動物の羽根は菌を持っているので捨わないように躰けられた。この一方で、「免疫をつけるために、子どもを3歳までに動物園へ連れて行くとよい」という噂・迷信も作り出す。

管理された動物園内で免疫を求める姿と、園外の道や池で出くわした羽根を何となく畏れ遠ざける姿。我々は得体の知れなさに対し、いつも都合良く向き合う。それは、我々に日々浴び続ける情報を吟味する猶予や能力がなく、曖昧なまま処理するほかないことを物語っている。親や先生による教育は、ときに自然科学よりも頼れるものとして存在し、我々の習慣として染みこんでいく。

私たちは今回、天王寺動物園に通い続け鳥の羽根を集めた。生え替わり時期に落ちた羽根や、死んでしまった鳥の羽根。ホロホロチョウ・ダチョウ・フラミンゴ・カモ・サギ。そして、その羽根を一枚ずつ除菌し無菌化した。私たちは繰り返し羽根に触れながら、得体の知れなさへ身体的な接近を試みる。

無菌化のプロセスで得体の知れなさが一つ取り除かれた羽根は、一体何を感じさせるだろうか。純粋な美しさか、それとも喪失した意味と現出した存在による魅力のなさか。

III 募金

大阪の街中を歩き、幾度と目にした募金ポスターの「赤い羽根共同募金は地域の人々の幸せのために役立てられています」というメッセージ。思い起こせば、募金活動は小学校でも必ず年に一度行われていた記憶がある。

募金者、募金を呼びかける人、そして「地域の人々」。人は、寄付の現場に立った際、参加可否や金額はこれら関係性の強弱が大きく作用するという。寄付の背後で我々が周囲に示している態度の正体は何か。また、我々が想像する「地域の人々」とは一体どのような人なのか。

私たちは、募金の場を作ることにした。募金を呼びかける人がいない状況のもと、赤い羽根共同募金の募金箱を enoco の入口にただ設置した。2ヶ月間の募金額は僅かだった。私たちは手元に残った赤い羽根を自ら募金を行い、手に入れた。

そもそも日本では、赤い羽根は社会奉仕のしるしとして一枚だけ手渡される。そしてそれを衣服に身につける習慣がある。装着された赤い羽根は自ずと象徴になる。

だが、いつだってそうだが、象徴は意味を変える。たとえば為政者の意図によって、たとえば不特定多数が作り出す空気感によって。赤い羽根は一人歩きができる。

記号化した赤い羽根が、染料で赤くした単なる羽根として振る舞われるとき、その羽根は物質として我々の認識に揺さぶりをかける。